第 5 回

背泳ぎで数多の記録を残す

田 中 聰 子

（現姓：竹宇治）

tanaka satoko

Copyright © 2012 SASAKAWA SPORTS FOUNDATION. All Rights Reserved.

背泳ぎで数多の記録を残す　田中 聰子

銀メダル3個、銅メダル8個。2012年のロンドンオリンピックで日本の競泳チームは戦後最多となる11個のメダルを獲得し、「競泳ニッポン」を強く印象づけた。

オリンピックの競泳において、女子選手で初めてメダリストとなったのは、前畑秀子さん。1932年のロサンゼルスオリンピック・女子200m平泳ぎで銀、1936年のベルリンオリンピック・同種目で金を獲得した。

さて今回の「スポーツの歴史の検証シリーズ」では、初めての女性ゲストをお迎えする。前畑秀子さんに続いて、オリンピックの競泳で女子2人目のメダリストとなった竹宇治（旧姓＝田中）聰子さん（1960年ローマオリンピック・女子100m背泳ぎ銅メダル）だ。

聞き手／西田善夫　文／山本尚子　構成・写真／フォート・キシモト

水の都・熊本で育つ

―― 長崎県佐世保市でお生まれになった田中（現姓：竹宇治 / たけうじ）聰子さんは、ご両親の故郷である熊本県の六嘉村（現・嘉島町）に移り住んだということですね。そもそも、どこで泳いでいたのですか？

こんもりした丘のところに、あちこちから湧き水が流れているのです。田んぼの灌漑用水にするために、堰をつくって水をため、池のようになっている場所がありまして。透き通って本当にきれいな水でした。

―― さすが熊本、「水の都」ですね。

阿蘇の外輪山の伏流水ですからね。でも水温18度で冷たかった。夏のかんかん照りのときで20度ぐらいでしょうか。

―― 水泳が日常だった聰子さんが、正式に競技として始めたのはいつから？

嘉島中学1年のときからです。社会を担当していて水泳部の顧問でもあった西林恒英先生から、とても熱心に「君は水泳部」と誘われました。

中学時代

―― 引き抜かれたんですね。背泳ぎを専門にしたのはなぜ？

小学校6年のときの学校内の大会で自由形では2位でしたが、背泳ぎで優勝したのです。背泳ぎのキックがいいということでした。足の甲の骨のかたちがいいとかなんとか。それで、西林先生に「君は背泳ぎしか向いてない」と言われました。

小学時代（前列左から3人目）

ランニングが大嫌い

―― 高校は、福岡県の筑紫女学園に進みましたね。選んだ理由は？

筑紫女学園に吉田広臣さんという熱心な先生がいらしたのと、八幡製鉄所水泳部の黒佐年明コーチと出会ったからです。高校では下宿生活でした。

―― 猛練習をしたのでしょうね。

外のプールで練習していますから、4月下旬から10月の2、3週目までしか泳げません。泳げない期間は、ずっと陸上トレーニングでした。筋力トレーニング、階段を走る、大濠公園の周回マラソンもありました。私、走るのが大嫌いで、すぐに脚が痛い、お腹が痛い、頭が痛いと、痛いのを羅列して、いつも一番最後を走っていました。

―― そうだったんですか。聰子さん、成績もよかったんですってね。

そんなことありませんよ。でも勉強は嫌いじゃなかったですね。

アジア競技大会で金メダル

―― だんだんと知られてきたのは、高校生になってからですか。

中学3年のときに、100m背泳ぎで中学新記録をつくりまして。高校1年の5月、東京で開催された第3回アジア競技大会（1958年）に出場し、日本新記録で優勝しました。それが国際大会のデビューです。

―― そうそう、僕がちょうどアナウンサーになったときですよ。聰子さんの活躍は、すごく話題になりましたよね。

皇居前にてマスコミのインタビューを受ける（筑紫女学園高校時代）

高校に入学したものの、ずっとアジア大会に向けての合宿で、入学式にも出られませんでした。やっと登校できたのが、大会が終わった翌日の5月30日でした。この合宿の宿舎が、赤坂のプリンスホテルだったんです。田舎娘が都会のホテルで一人でベッド生活ですよ。とても楽しい思いをしました。

―― カーテンを開けると、大都会が見えるわけですね。

あのホテルのお庭は素晴らしかったですね。

博多と北九州を往復しながら黒佐コーチと練習

―― さあ、2年後の1960年のローマオリンピックががぜん現実味を帯びてきましたね。

はい。福岡市で練習を再開しましたが、黒佐コーチは八幡製鉄所の方ですから、北九州市にいらっしゃいます。今なら北九州と博多は新幹線で30分もかかりませんが、あの当時は1時間40分ぐらいかかっていました。黒佐コーチが月に1～2回博多に来るか、私が北九州まで行って練習するという毎日でした。

―― 電車に乗っている時間のほうが長いじゃないですか。

本当に。土曜日は学校はありましたが休んで北九州に行き、土曜・日曜と練習するということもやっていました。

―― そういう毎日の中から、オリンピック代表に選ばれたのですか。

ところが、9月ごろから体調を崩し、スランプに陥りました。いくら泳いでも体はだるいし、記録は伸びない。おかしいなと思い、病院に行ったら、「脚気」と言われ、「ああ、遺伝かな」と思いました。

―― お母様は聰子さんが小さいころ、同じ病気で亡くなられていたのでしたね。

ええ、小学校1年生のときでした。だからピンとは来ましたね。

イメージトレーニングで「魔法をかける」

―― 脚気というのはビタミンB1不足が原因でなる病気ですね。不安になられたでしょう。

黒佐コーチとの2人3脚で世界新記録に挑戦（筑紫女学園高校プール）

でも黒佐コーチが「泳げなくても心の中で泳ごうね」と、今でいうイメージトレーニングをやり始めました。当時、米国選手が200m背泳で世界新

記録を出したと新聞に載りました。黒佐さんは記者の方に、50mごとのタイムを調べてくださいと頼んでいました。

―― ラップタイムを。

そうです。最初の50mは36秒、次の50mは38秒、次は40秒、最後が30何秒でこれで世界新だよと。「体は動かさなくていい。座布団に座って、目をつぶって今から泳ぐよ」と言うのです。食卓の上にタイムウオッチを置いて、「自分で泳いで50m経ったらテーブルの上をポンとたたけ。最初の50mは36秒で泳ぐんだ」って。それでたたいたら、「今は38秒かかっている」と何度も何度も、かなり厳しくそれをやりました。コーチは私に「魔法をかけるから」と言っていました。そういうトレーニングを3～4カ月やって、季節は冬になっていましたが、お医者さんから「泳いでもいいよ」と許可が出て。ちょうど別府に温泉プールができたので、そこで練習しました。春が来て私は高校2年になり、7月12日、イメージしていたとおり、200mで世界新を出すことができたのです。

―― 完全にイメージトレーニングの手法ですね。黒佐さんはご存じだったのでしょうか。

さあ、聞いたことはありませんでした。何しろきっかけは私の病気ですから。

―― 災い転じて、ですね。

得意な200m背泳ぎはオリンピック種目になかった

―― 貴女（あなた）は200mの世界記録が多いんですよね。みんなが、オリンピックの背泳ぎは100mだけで200mがないことを残念がっていましたよ。

あのころ、100mも200mも短距離ととらえられていましたよね。その考え方がちょっと違っていたかなと。100mは本当の短距離、200mは中距離に入るという切り替えの意識が、あまりなかった気がします。

―― 200mが強かったということは、スタミナがあったのでしょうか。

他を圧する背泳のスタートダッシュ（1960年ごろの国際大会）

そうですね。でも瞬発力があまりないのでしょう。25mダッシュや50mダッシュの練習をたくさん取り入れましたが、やはり難しくてね。

初めてのローマオリンピックでもものおじせず

―― さあ、そして、初めてのローマオリンピックはいかがでしたか。

いやあ、楽しかったですよ。初めて飛行機に乗って、ヨーロッパに行くのも初めてですからね。あのころは20時間ぐらいかかりました。黒佐コーチは日本でお留守番。日本水泳連盟の太田光雄コーチが派遣され、黒佐コーチと頻繁に連絡を取り合っていたようです。

―― まだ高校生で、周りはみんな大人ばかり。緊張はしなかったの？

ローマオリンピック前に行われた事前合宿（前列右から4番目）

決勝の前はちょっと眠れなくて、夜中に起きてごそごそしていたと言われましたが、本人は覚えていないんですよ。ローマのときは何もわかりませんから、どこか腹をくくるというか。選手村にはダンスしたり音楽を聴いたり交流できるところがあるでしょう。試合のないときは、あそこへ行くのが楽しかったですね。

── 環境にすぐなじめるんですね。あのころの貴女は「キュート」という言葉がぴったりだと思っていました。愛くるしいという意味もあるけれども、ちゃかちゃかと動いて、きびきびしていてどこか頼もしさもあって。

順位がわからなかった銅メダル

── 100m背泳ぎで、銅メダルを取りました。あのときものすごい接戦で、3〜5位の選手が同タイムだったんですよね。

はい、あのころの着順は目視ですからね。なだれ込むようにゴールして、1人先に着いているなぐらいはわかりましたけど、みんな自分より先に着いたように思えて、「ああ、負けたかな」と。だからさっさと更衣室に行って水着を脱ごうとしていたら、コーチがずかずかと入ってきて、「おい、3位だぞ」と言われました。男性コーチがいきなり女子更衣室に入ってくるものだから、みんな「キャーッ」と大変だったの。私も「きゃあ、何しに来たんですか」「馬鹿者、さっさと着替えて出てこい!」って怒られて。

銅メダルを手に笑顔で
（1960年ローマオリンピック）

── それは面白いな。

八幡製鉄所に入社して社会人になる

ローマから帰国して、次の東京オリンピックまでは長かったですね。高校3年生ですから、進路で迷いました。大学へ行きたかったのですが、水泳のことを考え、黒佐コーチのいる八幡製鉄所に入社しました。

八幡製鉄に入社したてのころ
（唯一の長い髪の写真）

── 仕事もやったの?

一応やりましたよ。朝8時から午後4時まで仕事、そのあと5時から練習という毎日でした。経理部の審査課設備予算掛りに配属されて、桁数の多いゼロを数えて、そろばんで合わせなければいけない。

── 電卓がまだないんだね。

手回しの計算機ならありましたけどね。隣で黒佐コーチがその計算機を使っていました。私たちはその下準備で表の数字が合っているかやるのですが、何度やっても「合いません」と。周りの人はもうあきらめて、「もういいから、とにかくそろばんを練習しなさい」なんて言われていました。

厳しかった門限

なんと家が、黒佐コーチの社宅の裏庭だったんです。野菜をつくれるほどの広い裏庭があって、そこに一軒家を建てて、女性用の寮にしてくれました。門限が厳しくて、夜9時と決められていました。最初は8時だったんですよ。映画を見て、ご飯を食べて、9時に帰れますか?その時間にいないと怒られるから必死に帰っていました。

日本代表合宿の合間に山上りで一息
（右は木原光知子）

―― 黒佐コーチも、飲みに行ったりしないで、その時間に家にいたということですね。

おまけに犬がいたんですよ。私が帰ると、喜んじゃって、「黙ってて」と言っても、がさがさ動いて「ワンワン」と吠えるんです。それでコーチに「遅い、5分遅い」なんて怒られていました。

―― そこでも時計と闘っていたんですね。

東京オリンピック前、「頑張って」がプレッシャー

プレッシャーからか笑顔がない
カイロ（エジプト）遠征への出発時（右から２番目）

―― そうこうしているうちに、東京オリンピックが近づいてきます。

だんだん日本中の機運が盛り上がってきて、周りの方たちは私の顔を見るたびに「頑張れよ」と言ってくださるんです。「ありがとうございます」と笑顔で応えながらも、心の中でため息をついて、「いいから、放っておいてよ」と思うこともありました。

―― ローマで銅だから、金や銀を期待されていたんですよね。言うほうは「頑張って」と軽く言いますが、言われるほうにはプレッシャーですね。東京オリンピックのとき、僕はバレーボール担当だったんですよ。バレーの打ち合わせのときに、プールが隣だったので、よく練習を見に行ったものでした。水泳はチャーミングな選手が多くてね。

日本は木原光知子がいましたでしょう。木原は16歳、ほかも若い子ばかりで、私は22歳で一番上。おばさんと言われていました。外国の選手も18歳とか19歳とか。

―― フランスのキャロンなんてとくに人気がありました。

納得の自己ベストで悔いなし

各国選手のタイムと自分の練習の調子は把握できていますから、金や銀はとても無理だということはわかっていて、直前はとてもつらい状況でした。あのころ、100ｍ背泳ぎの私のタイムは1分９秒４でしたから、「勝っても負けても、自己ベストを出して終わりにしよう」と考えていました。

―― 決勝タイムは1分８秒６で４位でしたね。

はい。メダルは取れませんでしたが、自己ベストが出ました。「ああ、よかった！　これで後ろ指をさされずに済む。胸を張って世の中を歩けるな」というのが本音でした。黒佐コーチも「ご苦労さん」と。

―― 貴女の得意な200ｍ背泳ぎは、東京の次のメキシコオリンピックから種目に入ったんですよね。メキシコまで続ける気は？

いえ、26歳になってしまいますからね。

―― では引退については、何の未練もなかったのですか。

ローマオリンピックから帰国し空港で大歓迎を受ける

もちろん。東京オリンピックの２年後の、第５回アジア競

技大会（バンコク）まで出させていただきました。（結果は100m背泳ぎで日本新記録を出して優勝）

八幡製鉄所の同僚と結婚

―― 25歳のとき、八幡製鉄所の同僚であるバレーボール部所属の竹宇治清高さんと結婚されました。僕、ご主人のバレーボールの試合を中継したことがあるんですよ。

あら、そうでしたか。

―― あのころ、池田尚弘さんとか中村祐造さんがいましたね。

結婚して社宅に入ったのですが、体育館から歩いて5分のところでした。だから、練習が終わるとみんなうちに来るんですよ。うちの冷蔵庫はあっという間に空っぽ。

八幡製鉄バレーボール部の竹宇治氏と結婚（1967年）

―― よく飲む人たちでしたからねえ。あの当時、八幡製鉄所にはそうそうたるアスリートが多く在籍していましたね。

マラソンの君原健二さん、サッカーの渡辺正さん、宮本輝紀さん……。柔道もテニスも、ラグビーの選手もいましたね。みんな練習場が近くでしたから、それぞれ練習をがんばり、終わるとみんなで飲みに行って騒いだり。

――企業スポーツが一番華やかだったころですね。

「ぜんそく児水泳教室」をスタート

―― 結婚した聰子さんは、三女の母になられました。しばらくして、全国でも珍しい「ぜんそく児水泳教室」を福岡でスタートさせたのですね。

真剣に聞き入る子供達

1973年、夫の転勤で東京に移り住みました。東京にはスイミング・スクールがたくさんあって驚きました。水泳コーチのお話をいただいたのがきっかけで、指導者資格を取りました。そんなある日、長女の和佳子がぜんそくの発作を起こして、国立小児病院に入院してしまいました。ショックでしたね。バスタオル1枚分ぐらいの涙を流しました。担当の飯倉洋治先生にいろいろ質問され、「ぜんそくには水泳がいいんだよ、お母さんは泳げるのかね？」と。「はい、ちょっとだけ」と答えたら、「どのくらい？　国体は？」と聞くので、「はい、何度か」「じゃ、オリンピックは？」「2回ほど」と言ったら驚かれました。

―― それはびっくりだ。そうか、名字が竹宇治になっているから気づかれないんだ。

ええ。温水プールは温度と湿度が高い。水の中は重力の影響が少ない。ホコリが少なく、頭部が冷やされるなどの理由で、水泳はぜんそくの子どもによいのだそうです。そうこうしているうちにまた夫が福岡に転勤になり、飯倉先生に国立療養所南福岡病院の西間三馨先生を紹介していただきました。西間先生はかねてより「ぜんそく児の水泳教室を開きたい」という構想を持っていらして、1977年11月、「ぜんそく水泳教室《風の子会》」が始まりました。その後、風の子会の活動は広がり、今、私は東京の江戸川区でぜんそく児水泳教室をやっています。

水泳と健康増進

―― そのほか、聰子さんは初心者の方から高齢者の方まで幅広く指導されているのですよね。水泳は、とくに高齢者の健康増進にとてもいいスポーツなんですね。

1歳児のベビースイミングから高齢者まで、幅広い年齢層に取り組んでいただけるのが水泳です。私は、一般の泳げない方に泳げるようになっていただくことと、体力が落ち気味の中高年の方にプールを使ってのトレーニングプログラムを提供しています。水泳には、上達度が見えやすいという長所があるのです。例えば、顔を水に漬ける。これで一つできました。次は、浮いた。その次は、水をかいた、脚で進んだなどと、上達度が本人にわかりやすいのです。子どもにも大人にも“達成感”を味わってもらえます。そして水の中は浮力があるので足腰に負担がかかりにくい、自分のかけた分の負荷しかかからない、水の抵抗で運動効果がアップする、といった多くのメリットがあります。

僕は3年ほど前に脚をケガしたあと、水中ウオークをやっているのでよくわかります。それと、水というのは気持ちを落ち着かせますよね。

そうそう、心が落ち着く。ぽっかり浮いていると、何かお母さんのお腹の中に戻ったような気持ちになります。

子供達にも真剣な眼差しで指導

水泳が不登校児対策の一つのツールになる

引きこもりの子どもが、水泳を通して改善に向かっているケースもあるんですってね。どんなきっかけがあったのですか。

引きこもりの人たちは外へ連れ出すのが大変という話を聞きますが、私の場合はたまたまお母さまが水泳好きで「一緒に行こう」と連れてこられたのです。私たちからすれば、その人が引きこもりかどうかなんて関係なくいつもどおりに接しますから。「若い人が来た、うれしい」と迎え入れたら、恥ずかしそうに下を向いちゃって。「ほら、下向かない、胸張って」なんてみんなで声かけをするので、自然にとけ込めるようですよ。水に入ってぷかーっと浮いたり体を動かしていると、とってもスッキリするんです。だから引きこもっている人たちにも、その気持ちよさを味わってほしい。「ここに来ればいつでも泳ぎ方の指導をしますよ」というメッセージを、プールのどこかに出しておくと効果があるかもしれませんね。

水泳が、今の現代社会が抱える問題解決への一つのツールになるといいですね。

不登校児に限らず、自閉症やパニック障害などの子どもも、水泳に親しんでいます。たまたまそこにコーチがいたからできた、ということもありますが、笹川スポーツ財団さんでプロジェクトをおつくりになって、コーチを置いて募集をかけて発信されていったらどうでしょう。メッセージ次第だと思いますよ。「泳げない方歓迎」「これから始めたい方どうぞ」なんて一言書いてあげれば、「僕でも大丈夫かな」と思う子どもが名乗りを上げるかもしれません。私でよければ、コーチやりますよ。

子供達にも真剣な眼差しで指導

ウーマンズ・スイム・フェスティバル

木原光知子さんのお話を伺いましょうか。東京オリンピックのときのチームメイトというか後輩ですね。

はい、オリンピックの２年ほど前から合宿が始まったのですが、彼女は私より７歳下で中学生でした。まだ一人で寝たことがないと言うんです。布団を並べて寝たのですが、私の横にぴったりくっつけて敷くんですよ。

いつもはお母さんの隣で寝ていたんだ。

そうみたい。それで「手を握らないと眠れません」って、私の

布団に手を伸ばしてくるんです。驚きましたけど、握っていてあげるといつの間にか眠っていましたね。

――そんな彼女と貴女の二人が中心になって、1997年からですか、女性のための女性だけによる水泳大会「ウーマンズ・スイム・フェスティバル（ＷＳＦ）」が始まりましたね。

あれは木原の夢から始まったんです。水泳を通じて幅広い人たちと交流を持とうという趣旨のマスターズ水泳は、男性も女性も一緒の大会です。それを女性だけの力で、しかも華やかにやりたいと。「ウーマンズ」と名前をつけるのだから、女性が一切合切仕切って、男性はカメラマンも一人も入れずに。

――僕が横浜国際総合競技場（現・日産スタジアム）場長をやっていたときに、ＷＳＦの会場になったことがありますが、場長の僕でも入れませんでした。終了後、貴女と光知子さんと僕の3人でトークショーをやりましたよね。あれは面白かった。光知子さんと貴女は丁々発止のやりとりで。

木原の頭の回転の良さ、トークのうまさが出ていたでしょう。私たちはいつもあんな感じで会話していました。水泳界はいつもは一匹狼ですが、みんな仲がいいのです。スタート台に立ったときだけライバルで、ふだんは連帯感を持って練習をし、根底には信頼関係があるのです。

――聰子さんと光知子さんはそういう仲だったんですね。

彼女がＷＳＦをやりたいという思いを私は理解できたので、よく朝８時ごろから電話でやりとりしていました。ほとんど毎日ですよ。５年前に彼女がいなくなるまで……。

マスターズ水泳で満面な笑みを浮かべる木原光知子（中央左）と田中聰子（中央右）

――本当に素敵な仲間でしたね。

ＷＳＦのほうは順調に回を重ね、2012年10月に第16回大会が開かれています。

ロンドンオリンピック女子 400m メドレーリレーで銅メダルを獲得した日本チーム

2020年オリンピックの感動をぜひ間近で

――聰子さんを育てたのは、熊本であり、福岡であり、八幡製鉄所であり、そして目標としていたオリンピックなのでしょうね。

そうですね。２度も出場させていただいて非常に貴重な経験をしました。その場その場でしっかり努力を続けていれば、チャンスをいただくことができる。今の選手たちへのサポートとは比べものになりませんが、日本水泳連盟からもあの当時としてはベストのケアをしていただけたと思っています。

――まして、1964年は地元・東京で迎えるオリンピックでしたからね。いま2020年の東京オリンピック開催に向けての招致活動の真っ最中です。

ぜひ東京で開催してもらいたいですね。準備・運営においても、競技成績においても、一つの目標に向かっていくプロセスを、子どもや若い人たちにぜひ見てもらいたい。ロンドンではオリンピックだけでなく、パラリンピックでも素晴らしい感動がたくさんありましたよね。東京オリンピックの開催は、子どもたちがスポーツにもっと興味を持っていろいろ体験できるきっかけにもなるはずだと信じています。

70代の世界記録を樹立

――ところで聰子さん、70代になってまた世界記録をつくったそうですね。

トシのことは言ってほしくなかったけど。国際水泳連盟（FINA）で年代別の世界記録を認定しているんですよ。それを見て挑戦したくなって。筋力トレーニングをして練習をして、2012年6月の世界マスターズ水泳選手権大会100m背泳ぎで1分26秒15の記録をつくりました。

――すごいねえ。現役時代は1分8秒6だから、18秒しか遅れていない。

年を取ればだれでも筋力は落ちていきます。その年齢なりの筋力で泳ぐことに挑戦したいと思って。次は75歳になったらまた世界記録を目指しますよ。

――聰子さんは今でも前に向かって泳ぎ続けていますね。

人生長く生きていると、つらいことも嫌なこともたくさんありますよ。でも泳いでいれば、それが消えるんです。

ピンチはチャンス！

――では最後に、現在のアスリートたちに何かメッセージを。

ピンチはチャンス、ですね。私は病気をしなければローマでメダルは取れなかったかもしれない。娘がぜんそくにならなければ水泳教室はやっていなかったかもしれない。

――ピンチをチャンスに変えてきたのですね。

ピンチになったときの対処法は、みな自分で考えなければいけません。スランプや困難に何度も出会って乗り越えてきた人のほうが、いざというとき絶対に強いのです。だからピンチが訪れたとき、決して逃げることなく、向き合って対処して、強さを身につけていってほしいと思います。

水泳の歴史

1924 大正13 大日本水上競技連盟創設

1927 昭和2 競技規定、クイックスタートに改正

1928 昭和3 アムステルダム五輪開催、
日本水連 FINA に加盟

1930 昭和5 神宮外苑プール竣工

1931 昭和6 第１回日米対抗開催

1932 昭和7 ロサンゼルス五輪開催

1935 昭和10 第２回日米対抗開催

1936 昭和11 ベルリン五輪開催

1937 昭和12 FINA 規則改正でデッドスタートに

1938 昭和13 東京五輪返上、団体長距離競泳、
女子水上体育大会開催

1942 田中聰子氏、長崎県に生まれる

1944 昭和19 全国皆泳ラジオ水泳

1945 昭和20 日本水泳連盟として再発足

1945 第二次世界大戦が終戦

1946 昭和21 早慶戦、戦後初競技会、
第１回国民体育大会開催

1947 昭和22 日本選手権、古橋400m 自由形で世界新

1947 日本国憲法が施行

1948 昭和23 ロンドン五輪開催

1949 昭和24 日本水連、国際水連に復帰

1950 昭和25 第3回日米対抗開催、全国勤労者水上開始

1950 朝鮮戦争が勃発

1951 安全保障条約を締結

1952 昭和27 ヘルシンキ五輪開催

1953 昭和28 国民皆泳行事開始

1955 昭和30 第4回日米対抗開催、中学生通信競技開始

1955 日本の高度経済成長の開始

1956 昭和31 メルボルン五輪で潜水泳法禁止、
バタフライ新種目

1957 昭和32 シンクロ選手権始まる
日本水泳指導者協会再発足

1958 田中聰子氏、第３回アジア競技大会に出場
日本新記録で優勝

1959 昭和34 第1回末弘室内選手権、第5回日米対抗開催

1959 田中聰子氏、女子200m背泳ぎで2分37秒1
の世界記録を樹立。以後、7度にわたり記録
を更新

1960 昭和35 ローマ五輪開催

1960 田中聰子氏、ローマ五輪に出場。
100m背泳ぎで銅メダル獲得

1961 昭和36 第1回全国中学選抜大会開催

1962 昭和37 第４回アジア大会開催

1963 昭和38 ユニバーシアード開催、日豪対抗開催、
第６回日米対抗開催、東京国際水上

1963 田中聰子氏、第13回、日本スポーツ賞を受賞

1964 昭和39 東京五輪開催、代々木オリンピックプール
完成、日本水連 40周年記念会

1964 田中聰子氏、東京五輪に出場

1964 東海道新幹線が開業

1966 昭和41 学童泳力テストを開始

1966 田中聰子選手、第5回アジア競技大会に出場
背泳ぎ100mで日本新記録を出して優勝

1967 昭和42 東京ユニバーシアード開催

1968 昭和43 メキシコ五輪開催

1969 アポロ11号が人類初の月面有人着陸

1970 昭和45 選手登録制度実施
コンピューターにより記録整理実施

1972 昭和47
ミュンヘン五輪、日本室内選手権、
日本年令別大会開催

1973 昭和48
競泳記録 100分の1秒に。女子が日本学生選手権大会に正式競技、第1回世界選手権開催

1973 オイルショックが始まる

1974 昭和49
財団法人認可。シンクロ第1回パンパシフィック大会開催、水連50周年記念式典（岸記念体育会館）

1975 昭和50
第2回世界選手権開催、短水路日本記録を公認、
第1回全国測量者会議

1976 昭和51
モントリオール五輪、シンクロ第2回パンパシフィック大会開催、第1回全国遠泳大会開催

1976 ロッキード事件が表面化

1977 昭和52
ユニバーシアード、第1回FINA、
第1回水泳科学研究会開催、教士、
範士制度制定、有功章発足、共済会発足

1978 日中平和友好条約を調印

1979 昭和54
第4回パンパシフィック大会、
第1回 ジュニアオリンピック春季大会開催

1980 昭和55
モスクワ五輪開催（日本不参加）

1982 昭和57
第1回日中対抗、第4回世界選手権、
日本高校50周年記念大会開催

1982 東北、上越新幹線が開業

1984 昭和59
ロサンゼルス五輪開催、
五輪にシンクロ（ソロ・デュエット）種目決定、
第1回全国女子水球大会開催

1984 香港が中国に返還される

1985 昭和60
日本水泳連盟7代目会長に古橋廣之進 就任

1986 昭和61
第5回世界選手権（マドリード）開催
FINA GWL 世界マスターズ大会（東京）開催
開かれた水連を目指して地域会議開催

1987 昭和62
記録集計コンピューター化

1988 昭和63
ソウル五輪開催

1991 平成3
FINA競技規則改正（スタートは3回から2回へ）

1992 平成4
バルセロナ五輪開催

1993 平成5
東京辰巳国際水泳場会場完成
第1回 世界ショートコース大会（パルマ）開催

1994 平成6
日本水泳連盟創立70周年

1995 阪神・淡路大震災が発生

1996 平成8
千葉県国際総合水泳場が完成
第26回アトランタ五輪でシンクロが銅メダル獲得

1997 平成9
日本短水路選手権から「スタート1回制」導入

1998 平成10
泳力検定がスタート、横浜国際プールが完成

2000 平成12
シドニー五輪で中村・田島が銀メダル。中尾、
女子メドレーリレーが銅メダル、シンクロは
銀2個獲得

2001 平成13
世界水泳選手権大会「福岡2001」が 開催。
日本勢はシンクロ金1、銀1、銅1。競泳が銅4、
飛込は銅2個獲得。イアン・ソープ選手が最
優秀選手に選ばれる

2002 平成14
第14回アジア大会（釜山）北島が200m平泳ぎで世界新、アジア大会 MVP

2003 平成15
第10回世界水泳選手権（バルセロナ）北島が
世界新記録でダブル金、
シンクロは金1、銀2個獲得

2004 平成16
サイクルスポーツセンタープールが
24年の歴史に幕

アテネ五輪で北島選手が2種目で金、
柴田選手は女子自由形で初の金、戦後最多の
金3、銀3、銅4の10個獲得

2006 平成18
FINA シンクロワールドカップ横浜で開催

2008 平成20
北京五輪で北島選手が２種目連覇、
金２、銀3個獲得

古橋名誉会長が文化勲章を受賞
（スポーツ選手では初）

2008 リーマンショックが起こる

2009 平成21
古橋廣之進記念浜松市総合水泳場
（ToBio）が完成

競泳日本代表チームの愛称を
「TOBIUO JAPAN（トビウオジャパン）」に決定

古橋名誉会長が世界選手権（ローマ）の
大会会期中に急逝

2011 平成23
主要大会を東日本大震災復興支援チャリティー
大会として実施

2012 平成24
ロンドン五輪、男子200m平泳ぎ 入江陵介、
女子 200m 平泳ぎ鈴木聡美、男子４×100m
メドレーリレーで銀メダル。銅メダルは８個獲得

1歳の頃

小学時代（前列左から3人目）

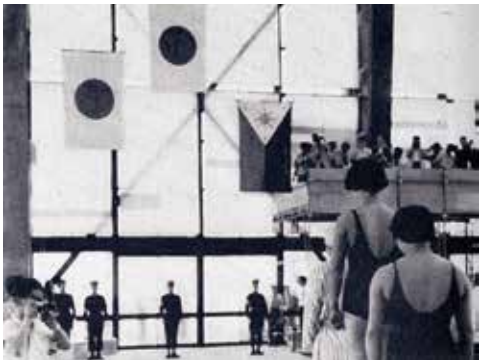
中学時代

皇居前にてマスコミのインタビューを
受ける（筑紫女学園高校時代）

クラスメートに囲まれお弁当を広げる（筑紫女学園高校時代）

黒佐コーチ（左）の元で猛練習に励む
（八幡製プール）

黒佐コーチとの2人3脚で世界新記録
に挑戦（筑紫女学園高校プール）


東京で開催されたアジア大会で優勝、国際大会デビューを飾る
（1958年）

日本代表に選ばれる

他を圧する背泳のスタートダッシュ（1960年ごろの国際大会）

日本代表合宿の合間に山上りで一息
（右は木原光知子）

フォトギャラリー

八幡製鉄に入社したてのころ
（唯一の長い髪の写真）

プレッシャーからか笑顔がないカイロ（エジプト）遠征への出発時（右から2番目）

ローマオリンピック前に行われた事前合宿（前列右から5番目）

銅メダルを手に笑顔で
（1960年ローマオリンピック）

ローマオリンピックから帰国し空港で大歓迎を受ける

1965年の日本選手権での力泳

東京オリンピック水泳日本代表チーム（前列左から5番目）

八幡製鉄バレーボール部の
竹宇治氏と結婚（1967年）

自宅付近で3歳の長女 和佳子
ちゃんと

背泳ぎで数多の記録を残す　田中 聰子

真剣に聞き入る子供達

子供達にも真剣な眼差しで指導

第1回世界マスターズ水泳でも世界新を出し花束を受け取る（1986年／東京）

国際水泳殿堂受賞式でのスピーチ

国際水泳殿堂歴代受賞者写真ボードの前で

マスターズ水泳で満面な笑みを浮かべる木原光知子（中央左）と田中聰子（中央右）

水泳ローマの会（2007年）

ロンドンオリンピック女子400mメドレーリレーで銅メダルを獲得した日本チーム

ロンドンオリンピック水泳祝賀会にて橋爪四郎氏等と